

非漢字圏¹における漢字教育に関する実態調査および提言 ーヤンゴン外国語大学におけるインタビュー調査を通じてー

栗原 由加、関 かおる²

キーワード：ミャンマー、非漢字圏の学習者、漢字学習、モチベーション、意味、頻度

1. はじめに

この20年、日本国内において、日本語教育は、事実上「漢字圏の学習者のための教育」に終始していたように思われる。これは、日本における外国人留学生の割合において、漢字圏出身の留学生が多数を占める状況が続いていたことによる。そのため、日本語の文字教育、特に漢字教育については研究が進まず、留学生が日本語能力試験N1レベルの漢字語彙力を目指すことの是非については、特に関心の対象とされることはなかった。

ところが昨今、日本語教育事情は変化しつつある。この変化は、2006年以降、既に日本語学校では始まっていたことだが、特にベトナムを中心とした非漢字圏出身の留学生が増加し、漢字圏出身の留学生は減少しつつある。日本学生支援機構の「外国人留学生在籍状況調査結果」によると、留学生全体に対する漢字圏の留学生の割合は2012年まで65%前後を維持していたが、その後減少に転じ、2013年61.6%、2014年54.7%、2015年48.7%と減少が続いている。一方、2015年に留学生数の割合が増加している国は、1位ネパール（5,802人増、前年比155%）、2位ベトナム（12,443人増、前年比147%）、3位ミャンマー（820人増、前年比142%）と、いずれも非漢字圏の国々である。こうした状況の中で、非漢字圏出身の学習者にとって、漢字習得の困難さが日本語学習、日本語能力試験受験、進学、最終的には就職の大きな壁になっているという事実が注目されるようになってきた。また、日本語教育の現場でも、ひらがなでも書ける事柄を、あえて漢字表記にするよう学習者に動機づけることの難しさが現実的な問題となっている。

本研究は、以上のような背景を踏まえ、文字教育の中でも特に漢字教育に焦点を当て、国内外の現状を調査・分析し、日本語学習者にとってよりよい文字教育の在り方を検討するものである。非漢字圏の学習者にとっての漢字学習の難しさは岡崎（1993）の研究で詳しく指摘されているが、一方で、「難しい」という意識を、どのように「楽しい」に転じさせることができるのか、その方策については今後の研究が期待される分野である。

本稿は、2016年9月9日にヤンゴン外国語大学（ミャンマー）を訪問し、日本語学習者および大学教員に行ったインタビュー調査結果に基づくものである。ミャンマーは、2015年時点で、日本における留学生増加率第3位の国であり、現在、日本留学の動機が高まっている。ここでは、ミャンマーにおいて、「楽しさ」に焦点を当てて行ったインタビュー調査

結果をもとに、非漢字圏の学習者にとっての漢字学習の在り方について考える。

2. ミャンマーの日本語教育事情の変遷

ここで、ミャンマーの社会状況の変化と日本語教育事情の現状について触れておきたい。筆者は、2年前の2014年3月に一度ミャンマーを訪れている。この時は、ヤンゴンに事務所を構え、技術系の大学を卒業した学生を積極的に日本で就職させようとしている企業に同行し、学生の渡日前の日本語教育事情ならびに現状を知る目的があった。筆者の所属機関が、この企業に就職する学生の来日後の日本語研修を請け負う予定だったため、現地の日本語教育機関での内容を知り、来日後の研修に活かしたいと考えての訪問である。今回2度目の訪問となるミャンマーであるが、その変貌ぶりには目をみはるものがあった。日本企業のみならず、中国、欧米などの外国資本がかなり入り、町の景観が変わったことに止まらず、インフラ整備が進み、どこにいてもほぼ問題なくインターネットが使えるようになっていた。また、時に停電がないわけではないが、ネット環境は以前よりかなり安定していると感じた。また、技術研修生を育成するために日本企業数社が出資して設立されている日本語教育機関が増えたことも大きな変化である。経済の動きと共に、前述のように留学生増加率第3位となったミャンマーの日本語教育事情の変化がこのような点からも感じられた。

高等教育機関における日本語教育の前提知識としては、ミャンマーの大学入試において、日本の大学入試センター試験のような試験が高校卒業時に一斉に実施され、成績上位者から進学してよい学部が決まる仕組みが基本にあることを理解する必要がある。成績上位者から医学部、ITと続き、文系の大学はその下に甘んじているということであった。今回、インタビューを実施したヤンゴン外国語大学は1964年に創設された国立外国語学校を前身とした外国語大学であり、ミャンマーの外国語教育の中核機関である。大学は、ヤンゴン市内の立地条件の良い場所にあり、学生数は約2,500名、8学科、日本語学科は創設当初から開講されている。今回、インタビューに答えてくれた学生になぜ日本語を学んでいるのかと尋ねたところ、数名は共通試験の点数が足りず医学部に行けなかったからだと答えていたが、その他の学生は将来、日本に行って仕事をしたいからだと話していた。2年前は医学部、ITという順であったが、今回学生に聞いたところでは、医学部がトップであることは変わらないが、卒業後の仕事のことを考え、外国語を学ぼうとする学生が増えてきたため、必ずしも医学部、ITという順位ではなくなっているという。その中でも日本語を学び、日本で就職することは学生にとって、かなり現実的な選択肢になっていると思われる。

2年前に訪問した教育機関では、日本語を学ぶ学生にとって何が一番問題になるかと、日本語教員に尋ねたところ、①発音、②漢字教育ということであった。①の発音については、母音、特に子音には含まれた日本語の[e]の音を[a]と発音してしまうため、[sensei]と話しているつもりが、[sansei]になり、意味の違いを引き起こしてしまう点が挙げられた。②の漢字教育については、形のみならず、一つの文字について音読み、訓読みを覚えていか

なければいけないことが指摘された。学習方法についても疑問点が指摘された。JLPT 日本語能力試験の N3 レベルに出題される漢字を授業で扱っていた機関では、問題集などのような試験対策は合格するには必要だが、実際の日本語の文が読めないことがあり、試験と実情との乖離をどう埋めたらよいか迷いが見られた。教室を一步出れば、ありとあらゆるところで漢字が見られる日本国内と異なり、国外での漢字教育の難しさはこの点にもあるのではないだろうか。

現在のミャンマーでは、日本国内とほぼ変わらず、新刊のテキストを手に入れることは可能だと思われるが、日本国内で作られたテキストが日本国外の実情に合っているかどうかは、大いに疑問がもたれる点であろう。ある教育機関では、漢字の意味とミャンマー語をできるだけ関連付けて覚えられるような工夫がされていた。たとえば、「床」という漢字を覚えるときには、ミャンマー語の床を表す「パケ」を使い「パケを掃除しよう」という文にして音と意味が同時に理解できるようにするなど、ミャンマーで日本語教育に 18 年間携わっているベテランの先生は、独自に開発した教材を使って学習させていた。教材についても検討の余地がある状況である。

3. 調査の概要

今回のインタビュー調査は、2016 年 9 月 9 日に、ヤンゴン外国語大学で学ぶ日本語学科 3 年次の学生 8 名および教員 2 名の協力を得て行ったものである。8 名の学生の日本語能力については、日本語能力試験 N2 取得者が 4 名、N3 取得者が 4 名である。質問者と学生は 1 対 1 で、一人あたり 20 分程度、日本語でインタビューを行った。質問事項は、以下の 9 項目である。インタビューは、質問者 2 名（筆者）が、各々学生 4 名ずつを分担して実施した。

質問 1：あなたの好きな漢字は何ですか。その理由は何ですか。

質問 2：あなたにとって、覚えやすい漢字は何ですか。その理由は何ですか。

質問 3：漢字の勉強のために、家ではどれぐらいの時間をかけて勉強していますか。

質問 4：1 週間で、何文字ぐらい覚えられますか。

質問 5：漢字をどのような方法で覚えていますか。

質問 6：漢字を覚えるための良い方法、覚えた漢字を忘れないための工夫を教えてください。

質問 7：漢字の勉強で、楽しいことは何ですか。

質問 8：漢字の勉強で、難しいことは何ですか。

質問 9：大学を卒業したら、どうしたいですか。

また、学生へのインタビュー後、ヤンゴン外国語大学の教員 2 名へのインタビューを行

い、ミャンマーでの日本語教育事情についての説明、ヤンゴン外国語大学での日本語教育についての補足説明を受けた。本稿では、上記9つの質問の中から、質問1、2、5、7、8、9を取り上げ、漢字学習について学習者は何を「楽しい」と感じるのか、回答結果と、それに基づく考察を示す。

4. 学習者にとっての「好きな漢字」「覚えやすい漢字」

4.1. 「好きな漢字」

学生に行ったインタビューの中で、ここでは、まず質問1について取り上げ、インタビュー結果を示したい。「あなたの好きな漢字は何ですか。その理由は何ですか。」という質問は、最初の質問として行われ、学生はその場で思いつく漢字、漢字語彙を上限5個、質問者が準備していた紙に書いた。したがって、学生が挙げた全ての漢字、漢字語彙は、学生が辞書を引くことなくその場で思いついて書くことができた「好きな漢字」である。

以下の表1は、学生が挙げた漢字を分類した上で、五十音順に並べたものである。「理由」は質問者が学生から聞き取ったもの、「分類」は、インタビュー終了後に、筆者（栗原、関）が相談の上で行ったものである。

表1 「好きな漢字」

	漢字	理由	分類
1	愛	人々が、一人ひとり付き合うときには、愛があったらいいから。	意味（価値観）
2	愛情	大切なもの。母親の愛情はいいものだから。	意味（価値観）
3	愛情	愛は人間にとって大切だから。	意味（価値観）
4	家族	みんな家族がある。家族が一番大切だから。	意味（価値観）
5	幸い	人間には幸いなときがあるから。	意味（価値観）
6	幸せ	幸せは大事なことから。	意味（価値観）
7	幸せ	誰でも幸せな生活をしたいから。	意味（価値観）
8	自信	私のがっかりしやすいが、自信が大切だから。	意味（価値観）
9	正直	正直は、人と人がつきあう時に大切だから。	意味（価値観）
10	素直	できるだけがんばって素直になるべきだから。	意味（価値観）
11	楽しい	苦しいことがあっても、楽しいことを考えて過ごすのがよいから。	意味（価値観）
12	楽しい	私は若者だから、楽しいことが好きだから。	意味（価値観）
13	忍耐	がまんしないと前に進めない。苦しいときも、がまんは大切だから。	意味（価値観）
14	勇気	どんなことでも、勇気があるのは大事だから。	意味（価値観）
15	優勝	どんなことでも優勝したいのは人間の希望だから。	意味（価値観）
16	黒	好きな色。幸せな色だと思うから。	意味(好きなもの)
17	桜	花が好きだから。	意味(好きなもの)

18	月	私は月曜日に生まれたから。「月（つき）」も好き。	意味(好きなもの)
19	椿	花が好きだから。	意味(好きなもの)
20	日本	日本は、勉強している国だから。	意味(好きなもの)
21	日本語	日本語が好きだから。	意味(好きなもの)
22	花	花が好きだから。	意味(好きなもの)
23	文化	国によって違う文化があるので、知りたいから。	意味(好きなもの)
24	蘭	花が好きだから。	意味(好きなもの)
25	動く	パーツの意味から漢字の意味がわかるから	パーツ
26	男	パーツの意味から漢字の意味がわかるから	パーツ
27	覚える	漢字の中に「目」が入っているのが好きだから。	パーツ
28	働く	パーツの意味から漢字の意味がわかるから	パーツ
29	見る	漢字の中に「目」が入っているのが好きだから。	パーツ
30	眼	漢字の中に「目」が入っているのが好きだから。	パーツ
31	夢	漢字の中に「目」が入っているのが好きだから。	パーツ
32	歌手	一つ覚えて、そこから熟語が作れるから	頻度
33	選手	一つ覚えて、そこから熟語が作れるから	頻度
34	手	一つ覚えて、そこから熟語が作れるから	頻度
35	左手	一つ覚えて、そこから熟語が作れるから	頻度
36	右手	一つ覚えて、そこから熟語が作れるから	頻度

1) 分類結果について

学生8名が挙げた漢字、漢字語彙は、異なり語数で33個だった。「愛情」「幸せ」「楽しい」は、複数の学生が「好きな漢字」として挙げている。32番から36番までは、同じ「手」という漢字を使った漢字語彙のバリエーションとして挙げられたため、全てを同じ「手」だと考えてもよいのだが、表1においては、学生が挙げたものを全て提示した。

以下に、学生が「好きな漢字」の理由として挙げた事項について、四分類して示す。なお、この四分類は、①意味（価値観）と、②意味（好きなもの）を同じ「意味」の類であるとするならば、大きく三分類と考えてもよい。

①意味（価値観）

「愛、愛情、家族、幸い、幸せ、自信、正直、素直、楽しい、忍耐、勇気、優勝」
 学生本人が、その言葉の持つ意味が好きな言葉。特に、自分が大切にしている価値観を表している言葉。

②意味（好きなもの）

「黒、桜、月、椿、日本、日本語、花、文化、蘭」
 学生本人が、その言葉の持つ意味が好きな言葉。特に、自分が好きな物、興味を持

っている物を表している言葉。

③ **パーツ**

「動、男、覚、働、見、眼、夢」

漢字のパーツによく知っている分かりやすい漢字が入っており、パーツを組み合わせることで、意味がイメージしやすい漢字。

④ **頻度**

「歌手、選手、手、左手、右手」

その漢字を使った漢字語彙を複数知っており、一つ覚えておくことで、効率的に漢字語彙を増やせるもの。

2) 学生にとっての「好きな漢字」とは

まず、結果としては、「意味が好き」な漢字、漢字語彙が、異なり語数 33 個中 21 個と、半数以上を占めた。これは、学生が「あなたの好きな漢字は何ですか。」という質問を、「あなたの好きな漢字の言葉は何ですか」と理解したためと考えられる。意外だったのは、学生が「好きな漢字」として挙げた漢字は、必ずしも簡単な漢字ではなかったこと、またそれにもかかわらず、学生がスラスラと手書きすることができたことである。特に、学生が挙げた 1 番から 15 番までの漢字、漢字語彙は、ストローク数が多く、形も複雑である。また、16 番から 24 番までの漢字、漢字語彙も、簡単な漢字ばかりではない。また、質問 1 について印象深かったのは、学生に対する 9 つの質問の中で、学生が最も熱心に自分の意見を述べていたのが質問 1 への回答だったことである。学生は、なぜこの漢字が好きなのかという理由として、自分の価値観を熱心に伝えようとしていた。

この結果は、漢字学習における学習者のモチベーションについて、改めて考えさせられるものだった。学生へのインタビュー後、ミャンマー人の教員にインタビューを行い、「好きな漢字」について学生に質問したことを伝えたところ、即座に「家族」と答えたのではないかと指摘があり、続いて「ミャンマー人にとって、家族はとても大切なものだから」というコメントがあった。これは、外国語の語彙の学習において、学習者が母語での生活で価値を置いている物事については、学習のモチベーションが高いことを再認識させるエピソードである。外国語学習において、学習者の興味関心が学習効率に影響することは従来から指摘されていることだが、漢字学習においても同様の可能性があるということである。漢字学習は、「簡単なものから複雑なものへ」という提示順で進めることが一般的な方法だが、学習者の観点で言えば、必ずしもこの提示順が学習のモチベーションを維持するとは言えない。実際の学生の回答を見たところ、「簡単な漢字はすぐに覚えられるが、難しい漢字は覚えにくいだろう」という一般的な予測は、実情とは異なっているようだった。

4.2. 「覚えやすい漢字」

次に、学生に行ったインタビューの中で、質問2について取り上げ、インタビュー結果を示したい。「あなたにとって、覚えやすい漢字は何ですか。その理由は何ですか。」という質問についても、学生はその場で思いつく漢字、漢字語彙を上限5個、質問者が準備していた紙に書いた。以下の表2は、学生が挙げた漢字を分類した上で、五十音順に並べたものである。「理由」は質問者が学生から聞き取ったもの、「分類」は、インタビュー終了後に筆者（栗原、関）が相談の上で行ったものである。質問1に比べ、質問2では、一つの漢字を答える場合が多かった。以下の表2に、学生が挙げたものを全て提示する。

表2 「覚えやすい漢字」

	漢字	理由	分類
1	学校	毎日習っている。よく書くから。	頻度（授業内）
2	国	よく使うから。	頻度（授業内）
3	小	よく使うから。反対のことばで勉強したから。	頻度（授業内）
4	好	作文を書くときに、いつも入っていることばだから。	頻度（授業内）
5	外	いつも勉強の中に入っているから。	頻度（授業内）
6	大	よく使うから。	頻度（授業内）
7	大学	作文でよく書く。毎日書くから。	頻度（授業内）
8	年	よく使うから。	頻度（授業内）
9	日本	日本語を勉強しているので、よく出てくるから。	頻度（授業内）
10	人	大事な言葉なので、毎日使うから。「人」は大切。	頻度（授業内）
11	分	「分かります」「分（ぶん）」など、よく使うから。	頻度（授業内）
12	若	私は若者だから、いつも使っているから。	頻度（授業内）
13	食	本を読むときに「食」がよく出てくるから。	頻度（授業内外）
14	人	どの本でも「人」という漢字はよく出てくるから。	頻度（授業内外）
15	言う	「口」があるから「言う」と、すぐに覚えられたから。	パーツ
16	英	草冠の漢字だから。	パーツ
17	覚	「目」が入っているから。（好きな漢字でもある）	パーツ
18	草	草冠の漢字だから。	パーツ
19	親	「見る」が入って覚えやすいから。「親」は、ほとんど覚えた漢字で構成されているから。	パーツ
20	働	意味がわかりやすいから。	パーツ
21	見	「目」が入っているから。（好きな漢字でもある）	パーツ
22	十	記号の+に似ているから。	形
23	千	カタカナの「チ」に似ているから。お金の漢字だから。	形
24	力	ひらがなの「か」カタカナの「カ」に似ているから。	形
25	女	簡単、書きやすいから。	形
26	心	書きやすいから。形もいい。	形

27	白	黒の反対の意味だから。形も書きやすい。「日」のよう。	形
28	二	簡単だから。	形
29	幸	好きな言葉だから。	意味(好きなことば)
30	花	花が好きだから。(好きな漢字でもある)	意味(好きなことば)
31	茶	いつも飲むから。	意味(身近なことば)
32	一	一番最初に覚えたから。	学習順
33	一 二 ...	数字の漢字は、一番最初に覚えたから。	学習順
34	学	大学に入って覚えたから。	学習順
35	正	五画。大学の先生が「正」で5回と数えると言っていたから、面白い。	その他
36	私	「自分」という意味がこの形であることが面白いから。	その他

1) 分類結果について

学生8名が挙げた漢字、漢字語彙は、異なり語数で33個だった。表2においては、学生が挙げたものを全て提示している。例えば、6番の「大」と7番の「大学」は、同じ「大」という漢字を含んでいるが、別々に挙げたため、表2には両方とも提示した上で、異なる語とみなしている。学生が「覚えやすい」の理由として挙げた事項については、以下のとおり七分類したが、①頻度（授業内）、②頻度（授業内外）を併せて「頻度」と考えるならば、大きく六分類である。

① 頻度（授業内）

「学校、国、小、好、外、大、大学、年、日本、人、分、若」

日本語の授業を受ける際に、テキストでよく見たり、作文を書くときによく使ったりする漢字。頻度の高さには、1) 漢字二字語彙のバリエーションが多い場合、2) 文型練習で何度も使う（「好きな～は何ですか」の「～」に、異なる言葉を入れる練習をする）場合、3) 音読みと訓読みのバリエーションがある場合（～分（ぶん）、分（わ）かります）がある。

② 頻度（授業内外）

「食、人」

授業外でも、日本語の本を読むときに、よく出てくる漢字。

③ パーツ

「言、英、覚、草、親、働、見」

漢字のパーツによく知っている分かりやすい漢字が入っており、パーツを組み合わせて、意味がイメージしやすい漢字。分かりやすいパーツとして挙げられていたのは「口」「目」「見」「(くさかんむり)」である。

④形

「十、千、力、女、心、白、二」

簡単で書きやすい漢字。ストローク数が少なく、形がわかりやすい。書くときは、ストロークを「いち、に、さん」のように声に出してカウントしながら、リズムカルに書ける。空中に指先で書いて見せることで、リズムカルに書く様子を示す学生もいた。「十」は「+(プラス)」に似ている、「千」「力」は片仮名の「チ」「カ」に似ているという意見もあった。

⑤意味 (好きなことば) (身近なことば)

「幸、花、茶」

学生本人が、その言葉の持つ意味が好きな言葉や、生活の中での身近な言葉。質問1で「好きな漢字」について「意味」を理由にした場合より、質問2で「覚えやすい漢字」について「意味」を理由にした場合の方が、ストローク数の少ない漢字が挙がったという印象がある。

⑥学習順

「一、一二・・・(漢数字)、学」

日本語学習における学習順位が早い漢字。「学」は、大学に入学することで、まずは覚える漢字である。

⑦その他

「正、私」

これらの漢字を「覚えやすい漢字」として挙げた学生の理由としては、他の①から⑥のような、漢字そのものが言葉として持つ特徴や使用頻度とは異なる事柄が挙げられていた。「(授業中の教員の説明として)「正」の字で5回を数えるという話が面白かった」「自分」という意味の言葉が、なぜこの形になるのか、面白いと思った」など、記憶に残るようなエピソードを伴って覚えた漢字であり、これは「学習中のエピソードによる記憶」のように位置づけるのが良いようなケースである。こちらは、教授法にも関わる問題であるため、本稿で大きく取り上げることはしないが、漢字学習における大切な側面ではある。

2) 学生にとっての「覚えやすい漢字」とは

調査結果を見ると、異なり語数33個中「頻度」が理由になっている漢字が13個と最も多く、使用頻度が、大きな理由になっていることは明らかである。次に「パーツ」から意味がわかりやすい漢字7字、「形」がわかりやすい漢字7字である。

筆者にとって意外だったのは、「覚えやすい漢字」に挙げられた漢字は、全体的に「好きな漢字」に比べれば、ストローク数が少ない傾向が見られるものの、インタビュー内容から判断すると、学生にとっては、必ずしも「ストローク数が少ない漢字は覚えやすい漢字」と

いう認識ではないらしいという結果である。記憶への定着という面で考えるならば、学生にとっては、字形の簡単さよりも、読み書きの頻度が高いこと、漢字の意味理解への手がかりがあることの方が優先されているようである。

また、「覚えやすい漢字」の理由として「頻度」が多く挙げたことは、漢字学習の「楽しさ」を考える上で注目すべきことである。この点については、次項「5. 漢字学習のモチベーション」で詳しく述べる。

5. 漢字学習のモチベーション

5.1. 「漢字学習で楽しいこと」「漢字学習で難しいこと」

では、学習者にとっての、漢字学習の楽しさとは何なのか。ここで、「質問7：漢字の勉強で、楽しいことは何ですか。」に対する回答について検討したい。学生の答えは以下のとおりである。

「先生が黒板に書いたことを読めて、意味がわかったとき。」

「漢字で物語が読めたとき。子どものときに読んだものを日本語で読めると楽しい。」

「好きな漢字を見て、読めたとき。」

「自分が勉強した漢字が、他の本にあるとうれしい。」

「(まだ読めないが) 新聞を読めるようになること。」

「自分の知っている漢字をどこかで見たとき。」

「ミャンマーには、日本の会社やバスが多くなった。毎日電車に乗るので、広告を見て、分からない漢字が出てきたら、電話の辞書で調べる。授業でそれが出てきて「知っています！」と言えるとうれしい。」

「将来、役に立つと思えること。」

上記8つの回答のうち、上から7つめまでの回答が、「自分が知っている漢字が出てきたとき」「自分が知っている漢字が使えたとき」である。また、最後の回答は「いつか使えると思うとき」である。これは、上記「表2：「覚えやすい漢字」」の理由として挙げられた「頻度」と関連する回答である。学習者にとって、「勉強したことが役に立った」と実感できるのは楽しい。つまり、よく使う漢字は覚えやすい漢字であり、覚えた漢字を使えたときは楽しい。そして、このサイクルが学習者のモチベーションにつながる。当たり前のことのようにだが、漢字学習となると、このサイクルを学習に生かすことが難しい。ここで、「質問8：漢字の勉強で、難しいことは何ですか。」に対する回答を以下に示す。

「何回書いても覚えられない。」

「なかなか覚えられない。」

「覚えられないこと。覚えても忘れてしまうこと。」

「ストロークを覚えること。」

「意味は分かっても、書くのが難しい。」

「一つの漢字に、読み方がたくさんあること。」

「画数が多いこと。また、読み方がたくさんあること。」

「訓読みがたくさんあるのが難しい。」

また、「質問5：漢字をどのような方法で覚えていますか。」という質問については、以下のとおり、とにかく「書く」という回答だった。「とにかく書いて覚えているが、なかなか覚えられず、覚えても忘れてしまう。」ということである。

「熟語で覚える。書いて覚える。自分で覚えたと思えるまで書く。」

「書いて覚える。漢字によって違うが、10回とか20回とか、とにかくたくさん書く。」

「書く。ひとつの漢字を4から5回書いて覚える。覚えるまで書く。」

「とにかく書く。一個の漢字、一個の熟語をノートに3行書く。覚えるまで全部書く。」

「ノートに書く。20回は書くので、覚えられなくても手が慣れる。」

「書く。一つの漢字を10回以上書く。夜勉強して覚えたら、次の朝、もう一度書いて覚える。」

「ひとつの漢字をノートに3行書く。(20個ぐらい)」

「覚えられるまで声に出して読む。」

漢字学習においては、「使う」前に、まずは「覚える」ための作業が長く、また労力も大きく、「楽しい」を経験するまでに時間を要する。このことは、質問8の回答として、1) 徒労感のある反復作業の苦しさ、2) 覚えることの多さ（読みの多さ）、に回答が集中していることから明らかである。なお、「漢字を覚えるために書く」という学習方法は、日本語母語話者にとっては馴染みのあるものだが、このような学習方法に慣れていない学習者にとっては「書く」と「覚える」は、必ずしも直結した事柄ではないという点にも注意が必要である。非漢字圏の学習者に日本語を教える現場で、日本語教師から「書いているのに覚えていないのは、なぜか」という疑問が提示されることがあるが、「書いて形を覚える」という学習方法が習慣化されていない学習者が、繰り返し書く作業の効果と意味を理解しないまま何度も書いているという状況は想像に難くない。文字学習の性質上、形を覚えるために「書く」という作業を省略することはできないが、学習者の漢字学習へのモチベーションを維持するためには、「難しい」を短縮し、「楽しい」の段階に早く進める方法を工夫することも、大切なことではないだろうか。本項では、学生の回答をもとに「楽しい」のは「使える」ときだと述べた。では、ミャンマーにおいて「日本語を使う場所」とはどこなのか。

5.2. 漢字学習を「楽しく」するために

ここで、ミャンマーの就職事情について触れておきたい。今回のインタビュー調査では、「質問9：大学を卒業したら、どうしたいですか。」と、卒業後の進路希望について質問した。この質問に対し、学生の答えは以下の通りであり、全員が「日本留学」あるいは「日本語力を生かした仕事をしたい」と明確に答えた。

「日本で働いて、通訳、翻訳の仕事がしたい。」

「日本へ行きたい。日本で会計士として働きたい。」

「日本の会社で働きたい。」

「日本の会社で働きたい。どんなところで働くかは、まだ決めていない。」

「日本に関係のある仕事がしたい。例えば、ミャンマーにある日本の会社で、通訳の仕事がしたい。」

「外交官になりたい」

「日本でファッション、デザインの勉強がしたい。」

「日本に留学して、日本語の勉強をしたい。」

現在、日本の大学に在籍している留学生にとって、大学卒業後に日本で就職先を探すことは非常に難しいと言われている中で³、ヤンゴン外国語大学の8名の学生たち全員が、大学卒業後の希望として「日本の会社で働く」「日本語を使って働く」、そうでなければ「日本に留学する」と即答したことに多少驚いたが、これにはミャンマー特有の事情があった。ヤンゴン外国語大学で日本語教育を行っている教員に、学生の就職事情についてインタビューしたところ、現在、ミャンマーでは日系企業が急増しており、ヤンゴンでは日本語のできるミャンマー人の需要は大きいとのことだった。4年制大学になってからの一期生（2015年度卒業）は33名全員が就職でき、就職先のほとんどが、ヤンゴンの日系企業とのことである。

つまり、ミャンマーの日本語学習においては、現在、日本語学習、学歴が、職業に直結するという状況があり、学習者が、就職において将来の見通しを持てる状況となっている。また、学生の話によると、日本企業の進出に伴い、街中で日本語を目にする機会も増えているということである。このような状況において、ミャンマーでは、教育の場以外でも日本語を見たり使ったりできる場所は増えつつあり、おそらくそれは、ビジネスに関連する日本語である。

このようなミャンマーの事情を背景に、「楽しい」段階に早く進める漢字教育を目指すならば、学習者の生活、文化的価値観を反映させた漢字教材を早い段階で使用すること、ビジネスでの使用をイメージした漢字の精査、提示順を工夫することなどが考えられる。どのようなテキストがよいのか、どのような漢字をどのような順番で提示すべきか、練習方法はどのようなべきかなどの具体的な議論については稿を譲るが、漢字学習については、学習者の文化

的価値観や母国の経済、社会状況を考慮した地域別の学習方法を検討することが、非漢字圏の学習者の漢字学習を「楽しく」するための一つの打開策になるのではないかと考える。

6. おわりに

日本語教育は新しい局面を迎えている。まず、非漢字圏出身の学習者が急増している。また、経済発展の著しい国では、日本語を使ってビジネスに従事できるチャンスが増えており、「使える」日本語を効率的に習得できる教育の必要性が高まっている。

このような状況を背景に、本稿は、ヤンゴン外国語大学の日本語学習者および教員へのインタビューを通し、特に「楽しさ」に焦点をあて、非漢字圏の漢字学習の一端を明らかにすることを試みた。一般的に、漢字学習には「苦行」のようなイメージがつきまとうが、インタビュー結果は、漢字学習には楽しさもあることを示していた。学生たちは既に大人で、人生に対する価値観と、母語による十分な語彙力を持っている。自国の生活、文化の中で大切に思っている話題については、語彙習得へのモチベーションが高く、漢字で書くこともでき、話すのも楽しい。また、使用頻度が高い漢字は、勉強したことが使えるので楽しい。非漢字圏出身の日本語学習者にとって、漢字学習が大きな難関であることは間違いないが、この漢字学習に「楽しさ」を切り口とした可能性が示されたことが、本インタビュー調査の収穫である。

謝辞

今回のインタビュー調査にご協力くださった、国際交流基金日本語専門家の田邊知成先生、ヤンゴン外国語大学のストウェー先生、ヤンゴン外国語大学日本語学科の8名の学生の皆様に、深く感謝申し上げます。

〈注〉

- 1 本稿では「漢字圏」を「現在、学校教育において漢字教育が行われている地域」、「非漢字圏」を「現在、学校教育において漢字教育が行われていない地域」とする。したがって、本稿においては、韓国、ベトナムなどの、過去には漢字教育が行われていたが現在は行われていない国については、「漢字圏」には含めない。
- 2 本稿の執筆において、栗原は1章・3章・4章の表1および表2を除く箇所・5章・6章を担当した。また関は2章・4章の表1および表2を担当した。
- 3 日本学生支援機構「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、2015年5月1日時点での留学生数は208,379人、法務省のデータによると、2015年の日本企業等への就職を目的とした在留資格変更数は15,657人である。

〈参考文献〉

岡崎正道（1993）「日本語教育における漢字指導のあり方」岩手大学人文社会科学部研究紀要『Artes Liberales』No.52, pp.11-28.

栗原由加（2016）「ビジネス日本語における漢字、漢字語彙についての一考察」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』創刊号， pp.71-84.

〈参考 URL〉（いずれも 2016 年 9 月 30 日アクセス）

田邊知成「経済開放の進むミャンマーの外国語大学に勤務して」『世界の日本語教育の現場から』（国際交流基金日本語専門家レポート 2015 年度）

https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/tounan_asia/myanmar/2015/report01.html

田邊知成「ミャンマーにおける日本語教師ネットワークの萌芽」『世界の日本語教育の現場から』4（国際交流基金日本語専門家レポート 2016 年度）

https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/tounan_asia/myanmar/2016/report01.html

〈付記〉

本稿は、文部科学省科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（課題番号：15 K 12897. 研究代表者：小川早百合）の成果の一部である。